

視 点 その2

思春期には再び子育てを！

本会代表(精神科医) 原田 正文

昨年夏には、児童相談所の子ども虐待対応件数が20万人を超えたというニュースとともに、「中学生の20人に一人が不登校」というニュースも報じられました。子ども虐待については、本誌の昨年11月号で取り上げました。今回は不登校の子どもについて考えるなかで、思春期の若者の心の動きと大人としての対応について考えます。

1. 不登校の出現率の年次推移

図1に小・中学校の不登校の児童生徒数の推移を示します。図1は平成10(1998)年度からのものですが、中学校で不登校の子どもたちが急激に増えたのは1970年代後半から2001年度にかけてです。1960年代に入り、特に理由が見当たらないのに学校に行けないという、いわゆる不登校の子どもたちの相談事例が問題になりました。しかし、70年代中頃は不登校の子ども数は1000人に2・3人くらいのものでした。ところがその後急増して、2001年度に1000人に28人と一つのピークに達しました。しかしその後は図1に示すように横ばいで推移していました。ところが、ここ8年間は増加傾向で、2020年度には1000人に40人に達しています。不登校の小学生が増加しているのも特徴です。

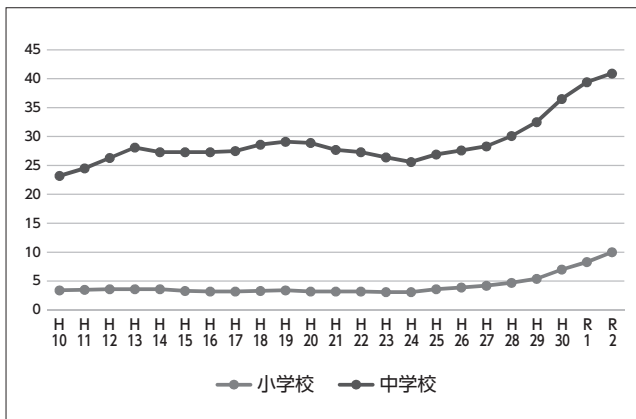


図1 不登校児童生徒数の推移
(1000人当たりの不登校児童生徒数) 文科省統計より

2. 不登校の子どもたちの変化

図1に示したように不登校の子ども数は最近かなり増えましたが、その変化よりも不登校の子どもたちの様相の方が大きく変化したように思います。ひとつは、ゲーム機やスマホの普及により、長期に欠席する子ども数が増えたことです。1990年頃は中学生で不登校になっても、半年か1年くらいで再登校する子どもが多かったよ

うに思います。しかし、現在は不登校が長期化するケースが多いです。というのは、学校に行かないで家にいる間、ほとんどの子どもはゲームをしたり、スマホで動画などを見ています。そうすることで「学校へ行けていない」という現実と直面し悩むことなく時間が過ぎてしまうのです。結果として長期に休んでしまうこととなります。これはなかなか深刻な問題です。

診察しながら私が特に気になっているのは、家庭の機能が弱体化した点と、子どもに「将来、社会に出て仕事をやる」という意識が希薄になっている点です。

3. 精神科思春期専門外来

学齢期の子どもが「学校に行きたくない」というときに親や周りの大人たちは何をどのような道筋で考えるべきか、という課題の参考になるとと思いますので、私が担当している精神科思春期専門外来での診察の手順を紹介いたします。

まず最初にするのは、体の病気かどうかを考慮することです。例えば、急に倒れると言ってもいろいろと原因があるからです。2番目にするのは、統合失調症や躁うつ病などの精神的な病気かどうかを見分けることです。特に高校生になりますと精神的病気の発症時期に入りますので、この鑑別が大切です。体の病気でも心の病気でもないとなると、心理的な問題、すなわち神経症(ノイローゼ)ということになります。別の言い方をしますと、不適応です。不登校の場合は学校不適応です。

図2は不適応の2つの側面を図示したものです。不登校というと「子どもの適応能力の低さ」が問題にされが



図2 不適応の2つの側面

ちですが、受け入れられる側、すなわち学校や子ども集団の受け入れ幅の低さも問題にされるべきです。特にいじめが普遍化している現在、いじめから逃れるために学校に行かないという選択肢も必要になってきます。

4. 不登校の社会的背景

社会的に大きな変化が起こるにはそれなりの理由があります。不登校の子どもたちが1970年代中頃より2000

年にかけて急増しましたが、その大きな原因の一つは図3に示すように日本人の思春期が長くなったことです。

「思春期」という時期は昔からあったように考えがちですが、昔からあった「思春期」は身体的なものです。初経があってから月々定期的に月経が来るようになるまでの期間を指しています。しかし、今普通に「思春期」と言えば、体が大人になってから精神的・社会的に大人になるまでの時期のことで、昭和生まれの世代から登場したものです。この新しい思春期のことを私は『大阪レポート』1)の中で「精神科的思春期」と命名しています。この精神科的思春期が長くなった時期が1970年代中頃より2000年にかけてです。不登校の増加時期とちょうど一致しています。

このあたりの解説は参考図書2)に詳しく書いていますので、ここでは省略します。

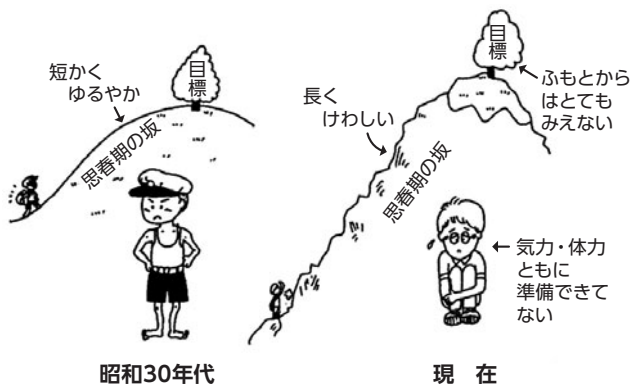


図3 乗り越えにくくなった思春期

5. 家庭に居場所をなくす子どもたち

私が気になっている家庭機能の低下という問題は、「東横キッズ」などに集まる子どもたちが象徴しているように思います。昨年12月にNHKのニュース9が「東横キッズ」について報じていました。予想はしていましたが現実を見せられると私はかなりびっくりしました。家庭に居場所がない子どもたちが増えているのです。ところが先日、大阪版「東横キッズ」に出入りしている14歳の女子中学生が入院してきました。

本人は、「私は何も悪いことはしていない。麻薬はやってないし。みなみに行けば同じ悩みをもつ子がいて、共感できる。彼もいる。私は今のままでいい」と言います。一方で「性の処理、金づるとして使われている。5万円稼いで来いと言われたこともある。クラミジアなど性病もうつされて産婦人科に通っている」と嫌な面も認識しています。入院中、電話で母親と話した後、彼女は必ず大泣きをして、「わかってくれない。すべて私が悪い」と泣きます。彼女の話は「母親に自分の話を聞いてほしい。今のしんどい思いを聞いてほしい」ということに尽きるように思いました。そこが母親には伝わらなくて彼女は泣きます。

家庭に居場所がなくなる理由としてはいろいろとあるとは思いますが、親や周りの大人が思春期の子どもが気持ち理解できないために居場所を失う子どもも多いのではないのでしょうか。

6. 思春期心性と大人の役割

そこで、思春期の子どもたちの心の動きを少し解説します。上述の「精神科的思春期」は、発達論的に正確に言いますと、思春期と青年期に当たります。思春期と青年期では心の動き方が異なります。私の実感では、個人差がありますが、「思春期」は体が大人になり始める小学校高学年から16歳くらいまで、17歳くらいから青年期に入ります。青年期になると、自分自身を客観的に見つめたり、大人のバランス感覚が何となく理解できるようになりますので、心の動きは理解しやすくなります。むづかしいのは思春期です。

心理学・精神医学領域では「思春期心性」という言葉で、思春期の若者たちの心の動きをあらわします。大人とも子どもとも違う心の動きを親や周りの大人が知っておくことが大切です。

思春期の若者の心の特徴としては、

- ・不安
- ・易刺激性
- ・気分の変動の激しさ
- ・自己中心性
- ・性急性
- ・両価性（アンビバレンツ）

などが挙げられます。中でも大人が最も知っておくべき点は「両価性（アンビバレンツ）」だと思います。

アンビバレンツとは、相反する価値概念が同時に、あるいは間をおかずに現れることを指します。例えば、親や教師に対して、好きと嫌い、独立と依存、尊敬と軽蔑などが同時に、あるいは間を置かずに現れるのです。親や周りの大人はなかなか対応に苦慮することになります。本人が言っていることの反対のことも同時に言っていると考えるとわかりやすいかと思います。「思春期心性」については参考図書2)に事例を通して説明していますので、参考にしてください。

小学校に入学する頃になると親はひと安心します。少年・少女期はなんの屈託もなく元気に過ごせる時期です。しかし思春期に入ると悩みが多くなり、再び親を求めます。しかし、その求め方が幼児期とは異なるので、親や周りの大人がそれに気づかないというのが現状ではないのでしょうか。子どもが思春期になると、再び子育てをしなければ、と親が子どもと向き合う必要があります。

参考図書

- 1) 服部祥子、原田正文著『乳幼児期の心身発達と環境 — 大阪レポートと精神医学的視点 —』、名古屋大学出版会、1991年。
- 2) 原田正文著、『不登校をプラス思考でりこえる — 親子の道しるべ30の事例 —』、農文協、1994年。